

D—15 農村の人口変動と食生活 —特に食意識の構造について—

厚生省人口研 内野 澄子

1. 農村地域ははげしい人口変動下にある。第1は著しい人口流出、出かせぎである。第2はそれにもかかわらず世帯は減少せずかえって増加さえ示していること、第3は人口流出の累積による年齢構造の不均衡化を通じて人口の自然増加率の急激な低下の傾向を示し、一部ではマイナスへの逆転さえみられるに至ったことである。

他方において、生活水準の上昇にもかかわらず、生活構造のアンバランス化は一般化している。特に、農村においては主婦の労働過重のため農夫症は43%に達しているといわれる（昭和41年度国民生活白書）。

所得と欲望との間の矛盾が生活構造にひきおこすひずみは農山村においてかえってはげしい。それは一般的に食生活へ圧力となる傾向が強い。この実態をあきらかにすることが本研究の基本目的である。

2. 本報告は以上の如き問題意識を背景として、東北、四国、南九州の農山村を対象として行なった約6000世帯に対する配票調査を基礎としたものである。特にここでは食に対する主婦の態度の地域ならびに社会階層格差を栄養、嗜好、経済性の観点から観察し、その社会人口学的意義を追求しようとした。